石牟礼道子のための
新たな声の文学が、
登場したのである。
――田中優子（法政大学名誉教授）

世界の根本を据えるのとおんなじぞ
おろそかに据えれば一切は成り立たん

独演

椿の海の記

――もうひとつのこの世を求めて――

第二章「岩どんの提灯」より

原作 石牟礼道子

出演・構成・演出 井上弘久　音楽 吉田水子　作曲 金子 忍

＜東京公演＞

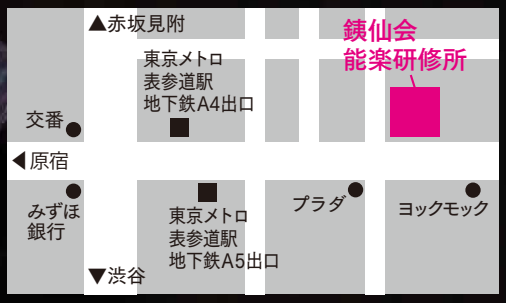
2023年10月7日(土) 14:30 OPEN 15:00 START 東京南青山 銕仙会能楽研修所

【第一部】お話 田中優子
ー石牟礼道子と
『椿の海の記』をめぐってー
『今、この時代を生きるということ』

【第二部】独演 椿の海の記

東京都港区南青山 4-21-29
東京メトロ（銀座線・千代田線・半蔵門線）
表参道駅 A4 出口 徒歩 3 分

〈チケット〉一般：3,000 円
（販売中）



〈チケット申し込み・問い合わせ先〉
公式サイト https://www.tsubaki-dokuen.com
MAIL ticket@mnhhappy.com TEL 090-9846-1910（井上弘久）

椿の海の記

4歳の自分＝みっちんを主人公にした石牟礼道子の自伝的小説（全十一章）。
4歳という、通常は言語化されることのない時期の、自らの自意識の目覚めを描ききって、
世界文学的にも他に類のない奇跡の書。水俣病患者たちに生涯寄り添い続けた
「石牟礼道子という魂のすべてが語られている」（渡辺京二氏）と言われる傑作である。

現代の浄瑠璃

ー井上弘久　独演「椿の海の記」に寄せてー

田中優子（江戸文学・江戸文化研究者）

私は十八歳の時、耳から入ってきた石牟礼道子「苦海浄土」の言葉に心をつかまれた。「これも文学なのか」という驚きとともに、文学観が変わってしまった。その理由のひとつは、それが声として耳から入ってきたからだ。方言の持つ圧倒的な力、自然界と交わる生きる言葉の力を感じ取った。そもそも日本の文学は歌から始まったのである。石牟礼文学はその古代以来の文学のありように、深く根付いている。

しかしその後、私は石牟礼道子を「読み」続けた。つまり活字で、文字で、黙したまま、読み続けたのである。せいぜいそれを超えようとしたのは、文学の授業において教師として、学生に向かって自分で朗読した時だった。しかしその声が学生たちの心をつかんだような気がしない。

井上弘久の『椿の海の記』を見て聞いた時、「ああ、あのとき私をつかんだのはこれだったのだ」と腑に落ちた。自分がやったのは、活字を読みながらの単なる「朗読」だった。しかし井上弘久の独演は現代の浄瑠璃ともいうべきものなのである。

浄瑠璃は朗読ではない。登場人物に乗り移り、生きた言葉として語る。浄瑠璃語りには人形と三味線がつく。人間ではなく人形つまり「かたしろ」なので、登場人物に似ている必要はない。語りを聞いた者たちが、言葉によって出現したその存在を人形に「見る」のである。三味線はメロディーではなく、登場人物のいる空間を表現する多様な「音」である。独演『椿の海の記』では、三味線は吉田水子のコントラバスとなり、人形は井上弘久の身体そのものとなる。そして、浄瑠璃は死者をもこの世に招き寄せる。

石牟礼道子の世界には山川草木、海と川、そこに住むすべての生き物が暮らしていて、それらが言葉になってほとばしる。人間と動植物はともに生きているから、神※経殿であろうと娼婦であろうと子供であろうと区別はない。死者と生者も共存し、山の神も川の神も「ひゅんひゅん」音をさせながら通っていく。そこには音がある。みっちんはその音を聞く。みっちんは仔牛にも兎にもなる。自然界全体を巻き込むのであるから、言葉は文字だけでは、とうてい足りない。

いや、浄瑠璃と表現したが、和歌であるとか能であるとか浄瑠璃であるとか言った途端に「型」が思い浮かんでしまうから困る。そのどれでもあり、どれでもない。石牟礼道子のための新たな声の文学が、登場したのである。

※神経殿（しんけいどん）＝精神異常者。狂人。いわゆる「きちがい」のことを当時の水俣の人々は神経殿とか神経様とか呼んでいた。道子さんの母方の祖母「おもかさま」もそう呼ばれていた。

撮影：スズキマサミ

井上弘久 Inoue Hirohisa / 俳優・演出家

1952年、東京生まれ。1979年より劇団転形劇場（太田省吾・主宰）に所属。名作「水の駅」「小町風伝」などで、日本および海外各地の舞台を踏む。1990年より劇団U·フィールドを主宰。構成・演出をつとめる。同劇団解散後、2013年より文学作品を一人で舞台化する「朗読演劇」を開始。チャールズ・ブコウスキーの「町でいちばんの美女」カフカの「変身」で好評を得る。2018年より石牟礼道子「椿の海の記」全十一章の連続上演を開始。三年をかけて全十一章の上演を果たして後、現在その全国行脚公演を遂行中。

撮影：宮内勝

吉田水子 Yoshida Minako / コントラバス奏者

東京藝術大学、桐朋学園大学研究科卒。躍動感あふれる伸びやかな演奏で、ラテン、シャンソン、タンゴ、映画音楽など、演奏と弾き語りでジャンルの垣根を超えて活躍している。井上とはブコウスキーの「1ドルと20セント」カフカの「変身」での共演を経て、「椿の海の記」の音楽を担当。時に自身の作曲した楽曲も織り交ぜての演奏で、独演「椿の海の記」には不可欠のパートナーである。
https://yoshidaminacoplanning.jimdofree.com

石牟礼道子 Ishimure Michiko / 詩人・作家（1927～2018年）

熊本県天草生まれ。生後すぐに水俣に移る。1969年、水俣病患者の魂の声を描いた「苦海浄土」三部作の第一部となる「苦海浄土わが水俣病」を発表し大きな反響を呼ぶ。73年、マグサイサイ賞受賞。その後、「椿の海の記」「あやとりの記」など次々と作品を発表する。「十六夜橋」で紫式部賞、朝日賞、「はにかみの国 石牟礼道子全詩集」で芸術選奨文部科学大臣賞、「祖さまの草の邑」で現代詩花椿賞を受賞。

田中優子 Tanaka Yuko / 法政大学名誉教授

江戸文学・江戸文化研究者で、エッセイスト。法政大学第19代総長。現在は同大学名誉教授。2020年に「苦海・浄土・日本ー石牟礼道子 もだえ神の精神ー」を刊行。女性ならではの石牟礼道子論は説得力に富み、危機的状況を生き抜くための希望を石牟礼道子の著作から導きだす。

題字：栗原光峯　出演者撮影：宮内勝、スズキマサミ　風景撮影：井上弘久 - 水俣 2018 -

全国行脚公演2023
独演「椿の海の記」

【北九州】カフェカウサ
2023年9月9日(土)/10日(日)

【熊本】熊本市国際交流会館
2023年9月16日(土)

【水俣】水俣おれんじ館
2023年9月18日(月)

【神戸】イカロスの森
2023年9月23日(土)/24日(日)

【東京】東京南青山 銕仙会能楽研修所
2023年10月7日(土)

藤沢 / 調布　TO BE UPDATED

チケット申し込み
問い合わせ先

〈チケット〉一般：3,000円（販売中）
「独演 椿の海の記 ～もうひとつのこの世をもとめて～」公式サイト
https://www.tsubaki-dokuen.com
MAIL ticket@mnhhappy.com　TEL 090-9846-1910（井上弘久）

公式サイトはこちら▲